平成２１年度　阪神北地域夢会議・さわやかフォーラムの概要

◆日　　時：平成２２年３月７日（日）13:00～16:00（交流会：16:00～17:00）
◆場　　所：大手前大学　いたみ稲野キャンパス（伊丹市）
◆参加人数：８８名
◆主　　催：阪神北地域ビジョン委員会、阪神北県民局

１．開催趣旨

さらなる少子高齢化や人口減少が予測される中、望ましい阪神北地域の将来像と取り組み方策を参加者全員で検討し、今後の地域でのビジョン委員活動や、「阪神市民文化社会ビジョン」の見直し点検に反映させる。

２．テーマ「語ろう夢を！地域を超え　世代を超えて」

３．プログラム

【第１部】プレゼンテーション
・　「阪神北の未来　兵庫の未来」兵庫県企画県民部政策参事
【第２部】テーマ別意見交換
・　「家族と家庭」「安全と安心」「生活と地域経済」「環境とエコ」のいずれかのテーブルで意見交換し、途中、他のテーマ（テーブル）へ移動し、再度、意見交換を行う。
【第３部】意見発表
・　テーマごとの意見をもとに、全員参加の意見交換

４．意見発表（発言要旨）

〈①家族と家庭　Ａテーブル〉

これからの家族と家庭はどうあるべきかについて話し合った。

今、家庭でうまく子育てができていない現状、学校が荒れていたり、電車のなかで化粧や食事をしたり、社会のルールが守れない、マナーがなっていないなかで、今後どう取り組んでいけばいいのかといった話が出た。

子育てについては、子どもであっても一人一人の人格を認め、個人を認めることで解決していくのではないか。自分が認められることによってうれしくなり、自信を持って生活できるのではないか。家庭でしっかりマナーやルール、けじめを守ることを教えるべきであるが、若い家庭ではできないかもしれない、そうであれば、地域で教えていかなければいけない。家庭でしっかりルールやマナー、けじめを守ることが身につけば、社会で活かすことにつながるのではと考える。

また、家庭や地域でも対話が大切ではないか、それにより信頼関係がうまれる。今は道徳

教育ができていない。学校でできないのであれば、地域でする、そのためには世代間交流が大切になる。つながり、絆、信頼関係を構築していくためには、気づいた人が、言葉でしっかりと伝える。そのときには、笑顔、感謝の気持ち、そして愛が大切である。それぞれがそれぞれの立場で実践していく、そうして、いい家庭、いい家族がつくれればと考える。

〈①家族と家庭　Ｂテーブル〉

共通の概念として、家族と家庭の見直しが挙げられた。家族とは、血のつながりといった伝統的な概念だが、家庭は、ともに生活する場、ともに苦楽を分かち合う場であり、時代によって変わっていくのではないかとして話し合われた。

夢は、家族の夢と家庭の夢にわけられる。１つ目は、多世代で子育てをということ、家族の夢は２世帯同居のすばらしさをアピールすることが考えられる。家庭の夢としての２世帯同居は、家庭という概念を膨らませて、地域が家庭の役割をするとすれば、地域で高齢者から若者まですべての世代で子育てをしていくといった地域が子育てに関わる仕組みをもっと積極的につくっていく必要がある。

２つ目は、ＳＴＯＰ少子化である。高齢化は防げなくても少子化は防げるのではないか、家族で取り組む場合と家庭で取り組む場合がある。家庭では、これを地域で見た場合はシングルマザーや若くして子どもを持つ夫婦を支援する、あるいは、企業に勤め、責任ある立場の女性であれば、子育てしやすい環境をつくるなどが考えられる。少子化についてはあきらめずに取り組む必要がある。

３つ目は、家庭を安らぎの場にということである。家族として安らげる場にしたいことと、これも家庭を地域社会と見た場合には、子どもたちを安らかに育てていくという夢がある。自分の子ども、他人の子どもに関係なく対応する必要があり、この場合には、家庭における家の観念を崩さなければならないと考える。

〈②安全と安心　Ａテーブル〉

安全・安心について、地域を限定して話し合った。安心できる地域とは、食の安全、交通の安全、身体の安全、心の安全が挙げられ、私たちが住み続けたいと思えるまちとしては、安全で自由な生活ができる、例えば、歩行者と自転車にはマナーが大切だと考える。

また、安全・安心を考えた場合、高齢者、住む地域、通勤といったそれぞれの立場によって見方がかわってくるので、そうした立場の違いを越えて、安全と安心をなしえるには、その人たちの立場を理解することが大事ではないかと考える。例えば、障害のある方は、なかなか個人の努力では安全・安心は達成できない。まわりの方の協力が必要である。地域で協力しなければならない安全･安心もあれば、個人の努力によって成し遂げられるものもある。そうしたことをすべてクリアするとすれば、お互いの立場の違いを理解し、尊重し合い、信頼し合うことが大事ではないかと考える。

〈②安全と安心　Ｂテーブル〉

個々の安全・安心というよりは、安全・安心なまちをつくるにはどうすればいいかといっ

た観点で、介護、医療、防災といったことに共通することについて話し合った。テーブル参加者にはガンで余命２カ月という宣告を受けながらも６年が過ぎ患者会の仕事をしている方がおり、その方からは、孤独にしてはいけないという意見があった。みんながつながりを持たなければならない。昔は、農業を基盤として、みんながずっと同じまちで生活したが、今は両親の生活は別の場所にあって、夜だけ一緒ということが当たり前になっており、そうした中では自然にはできないので、積極的につながりをつくらなければならない。しかし実際には難しいことから、まず小さな一歩から始めるとして、隣保、お隣さんへの声かけが大事であると考える。お隣を知らないと助け合いもない。お互いを知るということ、小さな努力から始める必要がある。また、こうした会議に参加される方は、助ける側の人たちだが、助けられる側の立場に立った考えで助け合いをしないと、押しつけになったり、助ける側の自己満足になるので注意する必要がある。

２点目は、行政との関連で、昔はこうしたサービスを受けるとき、お役所仕事でたらい回しにされた。今は以前より改善されたがさらに頑張ってほしい。また、そのためには職員の教育が大事である。

３点目は、安全・安心には特効薬はないので、長い目で見ることが必要である。人づくりとまちづくりが必要で、特に人づくりでは、小学生から教育する必要がある。また、地道に向こう３軒両隣、地域で働ける場、あるいは、生活できる場をつくる必要があると考える。

〈③生活と地域経済　Ａテーブル〉

１点目は、商店街の活性化である。近くに大きなスーパーができて、まわりの商店街がすたれていっているが、その商店は、地場のおいしい野菜や地元のお肉など、スーパーに負けない品質のものを取りそろえている。ますます高齢化する社会では、街の中のスーパーよりも家に近い商店が今後は機能していかなければならない。

２点目は、若者の就職・住める街づくりである。私は、現在、大学の３回生で就職活動しているところだが、関学の総合政策学部は、宝塚市や三田市で多くの学生がまちづくりに参画しており、そのままままちづくりに関係する仕事につきたいとして就職活動しているが、兵庫県にとどまることが難しい状況にあり、東京、運がよければ大阪に勤めるというのが現状である。そうしたまちづくりを志す学生が、地元にいるのに、どんどん外へ出ていってしまう。地元に就職先をつくって、住み続けられるまちづくりをしていただきたい。

３点目は、そうした住み続けられるまちづくりを行っていくと、既存住民で強固なコミュニティができあがってしまい、開かれたコミュニティがつくりづらい面がある。これからは、他地域から転居してきた方や、外国人の方に対して、開かれたコミュニティをつくっていかなければならない。ただし、そうしたことは全国的にブームとして広がっているが、そのブームにのって行うのではなく、より長期的な視点を持って、先のビジョンまで考えて、開かれたコミュニティを確立していく必要がある。

４点目は、着地型観光による活性化である。着地型観光とは、従来の旅行会社に頼った形の観光ではなく、観光地先の住民が来てくださいと手を挙げて、情報を発信していく観光である。この着地型観光により４市１町が理解しあえる手段になると考える。また、この着地型観光を取り入れることによって、今まで私たちが当たり前としていたものを、もう一度、観光資源として再確認することができると思う。そのためには、今みなさんいろいろな活動をしていると思うが、その中ですら、情報伝達ができていないのに、外に向かって発信することは容易ではない。このため、中に対しては、情報を共有する仕組みづくり、外に対しては情報を発信していく仕組みづくりの両方が必要である。

〈③生活と地域経済　Ｂテーブル〉

若い人が働ける場所、つまり子育ての心配がないようなコミュニティづくりができればといったことから話し合った。近年、核家族化が進んでおり、横とのつながりがないので、助け合いのシステムで埋め合わせいかなければならないと考える。

生産者の顔が見える作物づくりとして、食べ物であれば、私たちの口に入るものだから、どんな人がつくったのかわかるように、流通経路などは確認できた方がいい。逆に、消費者もこういうものを食べたい、つくってほしいといったニーズを持って、生産者に伝えていくこと必要ではないかと考える。

阪神北地域は４市１町からなるが、宝塚は宝塚、伊丹は伊丹といった自分たちのことだけしか考えていない。それぞれに自分の住むまちなので当然のことだが、宝塚にない良さを伊丹で発見する、川西にない良さを三田で発見するといった、もっと他のまちを知ることでマイナス部分を補い合い、結果、相乗効果が期待できると考える。

具体的なイベントとしては、Ｂ級グルメ大会を開催する。猪名川町であればイノシシを使ってコンペを実施することで、まちおこしに結びつけられればいいと考える。

最近 60 歳はまだまだ若いから、そういう方のパワーを地域に結びつけられないかと考えるが、そのためには、孤独死にさせない、心のケアなどが必要で、それにはやはりボランティアが重要と考える。

〈③生活と地域経済　Ｃテーブル〉

宝塚市の南部は都会であるが、北部の西谷はあまり知られていないので、現在、交流を進めよう活動している。１点目は、駅前などの商店街がさびれていることから、どう再生するのか。商店街については、ただ単にものを売るだけではなく、地域とのコミュニケーション、例えば、託児所を置く、あるいは、高齢者が集まって話しをする場を提供するといったプラスアルファにより、活性化を図るべきであると考える。

２点目は、都市と里山・田園をつなぐ、人の交流、情報の交流である。その中には、着地型観光といったものがあり、これについては、専門の松本先生から話す。先ほどもこの話があった。私どもの学生がここに来ているとは知らなかった。私たちの観光は、どこかに行きたいとき、近くの旅行会社に赴く、いわゆる発信型の観光である。着地型観光とは、私たちのところに来てほしいというものであり、最近、全国あちらこちらで成功しており、これが

一つの流れとなっている。ただし、観光ではなく、まちづくりに活かしていくことが重要ではないかと考える。必ずしも神社仏閣を見て回るのではなく、地域の方で何かつくる人がいれば対話する。これは通常と何が違うかと言うと、リピーターが生じるということ、去年行ったからまた行こうと、また来るよとか、年賀状のやりとりをしたりだとか、そこからまちづくりへとつながっていく。なかなか阪神北地域だけではつながらないのだが、外の人が入ることで中の人につながっていくという効果が期待できる。

〈④環境とエコ　Ａテーブル〉

環境とエコというテーマは大きいので何を切り口にしていいのかといったことに時間を要した。まず、なぜ日本は、このようなしょうもない社会となったのか。日本列島は、北海道から沖縄まで南北に長く、太平洋側、日本海側とそれぞれに気候が違い、河川の流域ごとに風土がある。そしてそれに基づいた歴史、文化、暮らし、町並み、集落があり、狭い国だが特色のある個性豊かなまちや人間性がつくられ、それが日本人を豊かにした。しかし、今は、経済性を優先し、新幹線や飛行機、高速道路などは便利でいいが、その反面、固有性や環境にやさしいまちづくり、人とのつきあいといったものが取り残されてきた。それをもう一度、見直そうということで話し合った。

地域の固有性に根ざした素直なライフスタイルをベースに以下、提案する。１点目は、地産地消である。生活の地域経済のテーマでも話があった。例えば、宝塚市北部にある西谷地域は、宝塚の北部というだけでなく、昔は、三田、川西、猪名川からの街道筋であり、田園風景の残る大切な地域である。ここで採れる野菜を安全な食として活用しようというのが地産地消である。

２点目は、リユース等のエコである。昔は、醤油瓶や酒瓶をいろいろなものに使ったり、竹の皮を包装に使っていた。また、公共・公益施設をお互いに使おうというのがリユースである。

３点目は、都市と農村の複合・共存である。都市計画では、都市と農村、市街化区域をわけている。成長社会であればいいが、今日の成熟社会では、都市のなかに農地があって、働きながら農業をしたいという方もいる。特に西谷地域との交流が必要と考えている。

最後に、間違いだらけの環境問題について言いたい。私たちは環境ビジネスにだまされている。環境は、市民の立場でよく考えて評価しないといけない。本当にＣＯ２が削減されているか疑問である。

〈④環境とエコ　Ｂテーブル〉

１点目の夢として、ホタルが住む阪神北地域が挙げられる。地域の水質改善の一つの指標としてホタルがたくさんいること、それが川の水質が改善されている状態と判断できる。日本中そうであればいいが、少なくとも阪神北地域からスタートしたい。水は、山から雨水として流れている。先日、私は佐用町に行き山の実態を見て、

やはり山を整備する必要があると感じた。市民でできる里山整備、植林、伐採以前の問題として、既存のものをいかに整備するかを市民で検討していく必要がある。また、３世代で取り組めば習慣として続くのではないかと考える。

２点目は、子どもの心を豊かにする阪神北地域である。子どもには感性豊かに育ってほしい。そのためには体験させることが必要である。自然にふれることで心は育つのではないか。谷口氏が企画する世界田植え選手権も３世代でできる環境活動である。このほか、ここにはホタルがいる、ここに山があって動物が棲んでいるといった地域の自然マップをつくれば、子どもたちも自発的に、より楽しめると考える。

なお、個人的に思うこととして、私たちには、地域というすばらしいものがある。個人で発信しても仕方がない。環境の中の違った分野でもみんなで取り組めば、一気に変わるのではないか。そのためにも今日の会議は大切だと思う。

〈④環境とエコ　Ｃテーブル〉

現在、ビジョン委員会水グループに所属しているので、１点目のボトルウォーターをへらしてＣＯ２をへらすといった提案は私にとってうれしい意見であった。これで 30 分のうちの 25 分を費やした。せっかく、税金を使って立派な上水道をつくって、おいしい水ができているのに、みなさんボトルウォーターをたくさん飲んでいる。ボトルウォーターをつくるのに数百倍のＣＯ２を出しているというニュースを聞いた。また、昨日の武庫川流域のフォーラムでもボトルウォーターがふえて、上水道の利用がへってきているという話があった。

２点目は、雨水の利用である。庭の散水や植木への水やりには雨水を利用することや、朝顔やゴーヤを栽培して日よけにしてはどうか。

３点目は、小学生への指導として、水への学習が不足しているのではないか。学校で教育してほしい。

４点目は、森の緑、街路樹でＣＯ２をへらすということである。間伐材として木を切り、また植林する。街路樹としての桜は、虫がつく、葉がたくさん落ちるといったことから評判が良くない。柳、クヌギ、ハナミズキがいいという意見であった。

５．専門委員、知事コメント（発言要旨）

〈藤本専門委員〉

話し合いの形、方法やまとめ方が年々、高度になって成熟してきた感がある。まとめ用紙も本当は磁石なしで貼れる最新の素材で、企画された方の苦労を感じた。

今回、一つ共通することは、各分野で小学校区よりも小さな単位、コミュニティでやっていく、あるいは解決していくことが多く、そうしたところに視点が置かれていると感じた。日々、生活する上での課題を共有する小さな単位で、みんなで知恵を出し合い、解決していく問題が提起されていた。例えば、子育ては、お母さんだけに任せるのでなく、地域の方々が子育てを支援する、自然体験させる、安心安全のことに関しては助け合い、地産地消もそう、地域の需用が地域の商店街に活かされるよう、地域商業を支えるということ、また、高齢者など弱い立場にある人を孤独にさせない、助け合うといったこと。これらは考えやすく、

たどりつきやすい解決方法だが、コミュニティで解決していくことは大変である。放っておいてできることではない。みんなが小さなコミュニティのなかで課題を共有し、解決策を考えなければならない。地域のいろいろな資源も共有し議論することが必要である。

何かしようと思ったときは、みんながある程度、役割や責任を分担しなければならない。今ある法律や制度を変えるというよりは、そうしたエリアでわかった人たちが課題を共有し、ローカルルールをつくり出して解決していくことがこれから重要となってくる。地域の小さなコミュニティで課題を共有し、仲間が役割と責任を分担して、夢を実現していくといったことが共通していると感じた。

〈今井専門委員〉

全体の印象として、どれも壮大で自信あふれる主張、提言で、この地域のスケールの大きさを反映していると感じた。みなさんは、私よりも大先輩であるから当然で、どれも傾聴に値するものであると感じた。

気づいた点としては、それぞれの発表でオーバーラップする内容がいくつかあった。これはこういう形式で話し合いすると当然の結果で、今後は、出された主張や提言、プランを整理整頓するという面倒な作業が残るわけだが、今後の課題も浮かび上がったように思う。ここで挙げられた取り組みについて、初めてやっていこうというものはむしろ少なく、日本全国、あるいは、世界、他の地域や社会で、同様あるいは類似の活動が既に実施され試行されている。このため、今後はそれらの活動の情報を収集する、もちろんインターネットでも集まるが、場合によっては、関係者にコンタクトをとれば参考になる。私は主に環境系の話し合いを聞いたが、ホタルやボトルウォーター、少子高齢化、若者の流出といったこともそうである。今後は、これらを整理整頓して、ここで出た夢を育てていってください。みなさんの取り組みに期待する。

〈滋野専門委員〉

夢を語るのがテーマだったので、もう少し荒唐無稽な夢があってもよかったと思うが、出されたものは現実に即したもので、夢というよりはむしろ現実に解決しなければならない喫緊の問題であった。実際には、いつ、どのようにするのかといった整合性をとろうとすると当然お金もかかってくる。ある程度の単位で動くには組織的な支援のために行政の努力もいる。これからは小さなコミュニティ単位で考えていくことが必要だが、なかなかコミュニティすべてで整っていくというのは少なくなるし、逆に人口バランスがとれなくなってくる。そのときに、どうバランスをとるかは行政の力であり、行政が目配せすることになる。

みなさんの活動は一生懸命だが、なかなか外に伝わっていない。情報発信について、日本人は下手で、行政も大変下手である。行政がすることもよく伝わっていなくて、こんなことをしていたんだとなる。非常に多い補助金のメニューから、適切なものを選ぶのは大変なので、コンサルタントを入れて頼み、そしてコンサルタントが儲けるという仕組みもある。も

っとわかりやすい情報伝達や、みなさんの活動が伝わる仕組みをつくっていけば、もっとつながりができて、今している個人の活動や小さなコミュニティ活動がもっと広がっていくのだが、日本人は下手である。私たちは、もう少し丁寧で上手な表現方法を広めていかなければならない。これは私も仕事としてやっていたので、なかなか市民や活動する方の情報を取り上げて広報していく機会がなかったが、今後、私も考えていきたい。

また、地域で活動に携わる方が集まり、どうしたら、お金をかけないで情報の交流を進めることができるか。最近は、ビデオキャスティングが流行っており、行政も取り組んでいる。中小企業は、営業にお金をかけられないので、ビデオに１分間もしくは３分間で収めたものを iTunes へ投稿する。そうすると iTunes では、情報を探しにいくのではなく、それぞれカスタマイズすると勝手に情報が送られてくる。そして関係する情報は、iPod で見ることができる。若者はよく利用している。なかなか携帯型のモバイルを持っている方は少ないが、今後、機種が変わるにしたがい、そうした機能がついたものとなり購入されていくと思われる。こういったものを使って、情報がより安価に広がっていき、交流が進むことに期待している。そうすれば、もっとつながりがいい方向に広がると思うので、そうしたことに協力できればと考えている。

〈井戸知事〉

まとめ用紙に感心した。いくら書いても直そうと思えばすぐに消せる。これには驚いた。子どものころにあった、つまみを引くと絵が消せるおもちゃを思い出した。模造紙にまとめようとすると、失敗しないようにまとめようとするから、結局まとまらない。間違えたら消せるという、ちょっとしたことだが、道具が改善するだけで随分、今回はまとまりがよかった。まとまりが良すぎて、きれいになりすぎた感じもする。しかし、内容を提案しようという各グループの討議の成果が表れていた。

家族と家庭のテーマ発表で、血のつながりと生活のまとまりといった家族と家庭は違うという再定義ができるのではないかという提案があった。家族間の問題と生活のまとまりを広げることで地域との関わりをどう求めるか、これは、家庭をそのようにとらえるには議論があるが、地域と家庭や家族とのつながりが大事だという再提案をされたと思う。今、地域をどうしようかが一番の課題と考えている。特に丹波など田舎の地区に提案しているのは、プライバシーを捨てましょう、ということ。今までプライバシー、プライバシーと言い過ぎた。例えば、丹波で暮らすなら、向こう３軒だけでなく、その地域は、こんにちわ、と言えば勝手に家に入れる、お金を取ったらいけないが、そこにあるお菓子くらいは食べてしまおうと、そのような地域全体が、それこそ家族になるような、そういう住まい方を求められないか、そのためにはどういう生活スタイルをつくっていけばいいのか、こんな議論をしていく必要があると提案したことがある。おもしろい言葉で「着地型観光」という発言があった。観光はともかく、着地型とはそういう発想にもつながると考える。発信型と着地型がどう違うのかよくわからないので、着地型だからおもしろそうというのも変だが、そのように理解した。

孤独化と関連して、大切に考えなければいけないことは、社会化と家族である。例えば、介護保険は、介護の社会化に取り組んだ結果で、社会システムとして、老後の面倒は社会が看ようということである。しかし、家族のあり方について、この社会化現象が悪影響を与えて、本来、守るべき、日本の美徳とされてきた家族間の相互扶助みたいなものが薄らいでしまった。制度と家族はどのように関わればいいのか、もう一度考える必要がある。今般、子ども手当も社会化で説明しようとしている。そうすると、悪いことが懸念される。子どもをネタに手当をたくさんもらおうという者が出てくるかもしれない。そういう意味で社会化という取り組みは、全体のある程度は助けるが弊害もある。その弊害があることに気づきながら、どうするのかといった認識を特にこれからは持たないといけないと感じている。

環境とエコについて、いろいろな提案があった。すべて地域循環をどのように進めていくかにつながると理解した。地産地消もそうだし、地域で生産し、消費し、そしてその消費されたものが還元され、また生産される。そういう地域循環の枠組みをどうつくっていくか。それは本当に小さな自分の家庭でやれること、地域全体でやれること、市町のレベルに広げないとできないこと、いろいろあると思うが、単位ごとに地域循環をどう考えていくかが一つのポイントになると受け止めた。昔は、里山も各家庭からみれば、燃料を取りに行く場所であった。私も子どものころ、父親の供として、近くの山に一年分の薪を刈りに行った。刈るのはいいが、運ぶのに苦労した思い出がある。そういう意味で各家庭での循環みたいなものがあった。それをどのように再構築するか、今日、提案された環境とエコの共通問題ではないか、例えば、雨水の活用にもつながると考える。

行政との関連で、職員を教育しなければいけないとの発言があった。これにこたえないと自分の言いたいことだけ言ってと言われる。何が問題かといえば、責任回避現象が起こることである。責任回避しなければいい。研修所で若い職員には、相手の立場に立ちましょう、県民の立場で考えよう、と言っている。難しい話になると、サッと逃げたくなる。行政が逃げないで、しっかり受け止めるようになれば、結論は同じでもそれだけで大分違う。どう受け止めるか、できないことはできないでもいい。できないが一緒に考えて、一緒に手探りして、やっぱり無理だとなると、それは同じ立場で仲間として考えたことになるから、行政もこれだけしてくれたと評価されるはずである。もう少し逃げないように職員に教育したいと思う。

滋野先生からビデオキャスティングの話があった。参画と協働条例をつくった８年前に、ボランティア活動やＮＰＯ活動をボランティアプラザのホームページに登録して、いつでもアクセスできるようにしたが、今でも 1,000 件超えるかどうかの登録であり、とても面倒で使われていないのが実情である。滋野先生の話を聞いて、登録制度をビデオキャスティングに変えたらどうかと思った。それだけ技術が発達しているのに、私たちの道具は遅れている。こういうまとめ用紙もある。システムを再構築しなければと刺激、示唆を受けた。

今日のテーマで、課題が整理された。その解決のために、どのように次のステップに踏み出すか、みなさんで検討していただき、具体のアクションを起こしていただくことをお願いしたい。